

<研究報告>

小学校英語教育に関する科学的根拠生成のための アウトカム指標の検討 —「知識及び技能」に焦点を当てて—

酒井英樹 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：測定法，アウトカム指標，知識及び技能，知識・技能，小学校英語教育

1. はじめに

本研究報告では，小学校英語教育に関する研究で用いられてきた測定方法を，小学校学習指導要領で求める育成すべき資質・能力のうち「知識及び技能」の点から分析する。

2. 研究の背景

英語教育学において，エビデンスに基づく教育政策や教育実践の判断を行うことの重要性が指摘されており，そのためにエビデンスを生成したり，評価したり，活用したりすることが求められている（亘理他，2021）。エビデンスとは，介入と結果の因果関係を示す科学的根拠のことであり，エビデンスに基づく医療に影響を受けて，エビデンスに基づく教育政策が注目を浴びている（ブリッジ，スメイヤー，& スミス，2013）。大城・酒井（2020）は，英語教育学の中でも，特に小学校英語教育に関しては，教育課程の改訂などさまざまな教育政策が実施されていることから，質の高い（すなわち，信頼性と妥当性の高い）エビデンス生成が行われる必要があることを指摘している（pp. 14-15）。一方で，寺沢（2015）は，介入と結果の因果関係がどの程度信頼できるかという点から作られた枠組みであるエビデンス階層の観点から，小学校英語に関する研究を概観し，政策的判断を裏付ける質の高い調査研究（すなわち，エビデンス階層の高い階層に位置する調査研究）が少数であることを指摘している。このように，エビデンスの生成・評価・活用が求められている一方で，質の高いエビデンスを示す研究が少ないという課題があるといえる。

この課題の要因の1つとして測定方法が挙げられる。まず，測定方法が多様であることが問題である。亘理他（2021）は，共通するアウトカム指標がないために，複数の研究から得られる結果が比較できないという問題を指摘している（p. 119）。また，測定方法が学術的研究の視点から選択されていることも問題である。寺沢（2018）は，政策的判断を裏付ける妥当性を持つエビデンス生成のために，(A) 内的妥当性があるか，(B) 外的妥当性があるか，(C) 適切な時期にアウトカムが測定されているか，(D) 介入の代理指標として用いられる変数は，政策上の介入と適合しているか，(E) アウトカムとして測定されている変数は，政策目標と適合しているかという5つのポイントを挙げている。酒井（2014）は，全国英語教育学会の学会誌である *ARELE* の第1号（1990年）から第22号（2011年）

を分析し、2000年以降、学習指導要領の改訂を機に、小学生を対象にした研究論文が多くなっていることを指摘している。これらの研究の測定方法は研究の目的と学術的背景によって選択されており、寺沢が挙げるポイントに基づいて測定方法が選ばれていないという実態がある。

本論文では寺沢(2018)の(E)のポイント、すなわち、アウトカムとして測定される変数は、政策目標と適合しているかというポイントに焦点をあてる。日本においては、日本児童英語教育学会(1980年創立)、小学校英語教育学会(2000年創立)などの学会誌を始め、全国英語教育学会の学会誌 *ARELE* などで小学生を対象にした研究や調査が報告されている中、エビデンスを生成するという視点でアウトカム指標の適切性を検討することは重要であると考えた。

3. 「知識及び技能」について

小学校における外国語教育の政策目標は、平成29年度に改訂された小学校学習指導要領の中で示されている、コミュニケーションを図る素地・基礎となる資質・能力を育成することであると捉えた。すなわち、小学校外国語教育に関する政策的判断のための科学的根拠は、介入が外国語によるコミュニケーションを図る素地や基礎となる資質・能力に関して影響を及ぼしていることを示す必要がある。外国語活動・外国語において育成すべき資質・能力は、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三本の柱から整理されている。本論文では、三本の柱のうち、「知識及び技能」に焦点を当てる(「学びに向かう力、人間性等」に関しては、酒井, 2021 参照)。

本節では、「知識及び技能」に関わる資質・能力について、どのように捉えられているのかを整理する。

小学校の教育課程の中で外国語教育が導入されたのは、平成10年告示の小学校学習指導要領からである。この時には、総合的な学習の時間の中で、国際理解の一環として英会話等(いわゆる英語活動)が実施できるとされた。小学校学習指導要領の中で目標が明示されたのは、平成20年に改訂された小学校指導要領においてである。第5学年と第6学年において外国語活動が実施された。外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」であった。「言語や文化について体験的に理解を深めること」が「知識及び技能」に関する目標となっている。この目標では、文化についての体験的な理解を含めているところに特徴があると言える。

平成29年度改訂の小学校学習指導要領によれば、「知識及び技能」に関する外国語活動(中学年)と外国語(高学年)の目標は次に示す通りである(下線筆者)。

【外国語活動(中学年)】

外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との

小学校英語教育に関するアウトカム指標の検討

音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。

【外国語（高学年）】

外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

すなわち、音声、文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて知識を持っているだけでなく、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることが求められている。これは、生きて働く知識の育成という点から重要である。英語の知識を持っているだけでは、生きた知識となっておらず、実際のコミュニケーションにおいて活用できた段階で生きて働く知識になっていると考えられる。この点について、文部科学省（2017, p. 70）では次のように説明されている。

本目標での「外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解する」とは、中学年の外国語活動の「外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付く」に対応したものである。高学年の外国語科では、日本語との音声の違いにとどまらず、文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについても日本語との違いに気付くこと、さらに、気付きで終わるのではなく、それらが外国語でコミュニケーションを図る際に活用される、生きて働く知識として理解されることを求めている。（下線筆者）

また、技能に着目するという考え方は『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校 外国語・外国語活動』（国立教育政策研究所教育課程研究センター、2020）からも把握できる。指導要録の評価の際には、三本の柱はそれぞれ「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」という観点で評価される。国立教育政策研究所教育課程研究センター（2020）の中で示されている「知識・技能」の評価規準の例では、聞くことに関して「指導者の誕生日や好きなもの、欲しいものを聞き取っている」や「相手の誕生日や好きなもの、欲しいものを聞き取っている」という評価規準（p. 53）が、話すこと〔やり取り〕に関しては「誕生日や好きなもの、欲しいものを尋ねたり答えたりして伝え合っている」という評価規準（p. 57）が示されている。これらは、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能に着目して評価することを示していると考えられる。

国立教育政策研究所教育課程研究センター（2020）が、知識・技能の評価の挙げているポイントに基づいて整理すると、小学校外国語活動・外国語において育成すべき「知識及び技能」の資質・能力は、表1に示す通りであると考えられる。

表 1. 育成すべき「知識及び技能」の捉え

領域	「知識及び技能」の捉え
聞くこと	実際のコミュニケーションにおいて、具体的な情報を聞き取ったり、短い話の概要を捉えたりする技能
読むこと	実際のコミュニケーションにおいて <ul style="list-style-type: none"> ・活字体で書かれた文字を識別し、その読み方（名称）を発音する技能 ・語句や表現を読んで意味が分かること
話すこと [やり取り]	実際のコミュニケーションにおいて <ul style="list-style-type: none"> ・指示、依頼をしたり、それらに応じたりする技能 ・その場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合う技能
話すこと [発表]	実際のコミュニケーションにおいて <ul style="list-style-type: none"> ・自分のことについて話す技能 ・自分の考えや気持ちなどを話す技能
書くこと	実際のコミュニケーションにおいて <ul style="list-style-type: none"> ・大文字、小文字を活字体で書く技能 ・語句や表現を書き写したり、(例文を参考にして) 語句や表現を用いて書いたりする技能

4. 研究方法

4.1 対象論文

表 1 で示した「知識及び技能」の点から、小学校英語教育に関する論文で用いられてきた測定方法を分析するために、主として日本国内の全国的な学会誌に掲載された論文を収集した。表 2 が、基礎となった分析対象論文の範囲である。

表 2. 分析対象論文

学会誌	学会	分析対象
日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要	日本児童英語教育学会	第 1 号(1982)～第 39 号(2020)
<i>JES Journal</i>	小学校英語教育学会	12 (2012～21 (2021)
小学校英語教育学会紀要	小学校英語教育学会	第 3 号(2002)～第 11 号(2010)
<i>Language Education & Technology</i>	外国語教育メディア学会	第 36 号(1999)～第 56 号(2019)
<i>JALT Journal</i>	全国語学教育学会	1 (1989) ～vol. 42(1) (2020)
<i>ARELE</i>	全国英語教育学会	1 (1990) ～30 (2019)

小学校英語教育に関するアウトカム指標の検討

これらの学会誌の中から、次の基準を設定し、論文を選択した。

- (1) 小学生を対象に調査をしたもの
- (2) 問題項目が明示されているもの（あるいは別の研究から特定できるもの）
- (3) 意味を理解したり表出したりする力を測定しているもの
- (4) 単文レベルのもの
- (5) 英語の授業に関して一般的な英語力を測定しているもの
- (6) できれば、学年間の比較、時間の変容、事前・事後など、変容に関するデータを報告しているもの

(2) については、本研究がエビデンス生成に役立つアウトカム指標を検討することを意図しているため、研究者や実践者が活用できるものであることから設定した。例えば、聞くことについてはスクリプトが提示されているものを選んだ。(3) の設定は、表 1 の「知識及び技能」の捉えの点から、実際のコミュニケーションにおいて活用できるためには、意味を理解したり表出したりする力を測定していることが必要であると考えたからである。(4) は、「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力と区別するためである。(5) については、ある特定の指導法の効果を調べようとしており、その特定の活動の内容を扱った英語力を測定しているものやある単元固有の内容を扱ったものなどは、エビデンス生成のための研究における活用可能性の点から削除した。(6) については、Wolfe-Quintero, Inagaki, and Kim (1998) を参考にして設定した。Wolfe-Quintero, Inagaki, and Kim は、流暢さ、正確さ、複雑さなどの指標が言語発達指標として妥当かどうかを検討する際に、他の測定具で測定された熟達度と高い相関が得られるか、または、複数の熟達度レベルの異なる群で統計的に有意な差が見られるかを基準とした。本研究では、介入の効果（すなわち指導の効果など）を測定するために妥当なアウトカム指標なのかを検討するために、学年間の比較、群間（例、統制群 vs 実験群）の比較、事前・事後の比較などの間で差が見られるかに焦点を当てた。

なお、これらの研究論文に加えて、論文で言及されたアウトカム指標に関する文献があれば収集し、分析に含めた。

4.2 分析方法

分析観点として、次の2つを設定した。第1に、概念の検討である。先行研究で測定しようとしている変数が、表1で示した「知識及び技能」の捉えと合致しているかを検討した。第2に、測定方法の検討である。信頼性の確認や学年間の比較や時間の変容の検出可能性の点から分析した。

5. 結果

5.1 聞くこと

聞くことの測定方法の検討の結果、聞くことによる文法性判断テストや音韻認識テストなど、意味の理解を必ずしも伴わない測定具は削除した。また、外部テスト以外のテスト

については、スクリプトが全て示されていないものは削除した。自己評価（質問紙票）を活用した研究もあったが、聞くことに関して単独で分析がなされていなかったため、削除した。その結果、聞くことの測定方法については、外部試験、自作リスニングテスト、市販図書に分けられた。

(1) 外部試験

外部試験については、学校英検 Jr.（旧、児童英検）の使用が見られた。学校英検 Jr. の BRONZE（最も容易なレベル）は、バトラー・武内（2006）、物井（2016）、和田・木下・菊原・和田・酒井（2019）で使用されている。学年間の差や時間変容が報告されているが、比較的高得点であることや天井効果が見られた。信頼性を示す研究はなかった。

学校英検 Jr. の SILVER を用いた研究として、泉・萬谷・アレン玉井・長沼・田縁・大田・島崎・森本（2014）がある。5年生と6年生の1年間の変容を調べたが、統計的に有意な差ではなかった。信頼性は示されていない。

学校英検 Jr. の GOLD を用いた研究として、石塚・太田（2016）と志村・萬谷・石塚（2016）がある。GOLD はリスニングだけでなく、文字を読む問題も含まれている。時間の変容は報告されているが、信頼性は示されていない。

学校英検 Jr. に関しては、概して、学年間の変容や時間変容が見られるが、信頼性が示されていないなどの課題も指摘できる。また、児童の能力に合ったレベルを選択する必要がある。最後に、GOLD は、文字を含む問題も含まれているため、「聞くこと」の測定方法として選択する場合には適していないこともある。

(2) 自作リスニングテスト

自作リスニングテストとして、YTK リスニングテスト（湯川・高梨・小山，2008，2009；湯川・高梨・小山・川中，2009）がある。37問で、音と文字の対応や、絵本の要約を含む。湯川・高梨・小山（2009）では DVD によってテストが公開されている。

湯川・高梨・小山・川中（2009）は、YTK リスニングテスト、アンケート、YTK スピーキングテストを事前事後（半年の間隔）に実施した。スピーキングテストは事後テストのみであった。リスニングテストに関しては、53名。事前テストにおいて 53.96 点であったものが、事後テストにおいては 62.42 点に上がり、統計的に有意であった。また、湯川・高梨・小山（2008）は、7つの小学校の5年生と6年生に実施したが、学年比較等は行っていない。

YTK リスニングテストは、音声が入ることは利点として挙げられるが、信頼性が示されていない点が課題として挙げられる。また、聞くことの「知識及び技能」の評価としては、音と文字の対応の問題及び絵本の要約問題は削除して分析する必要がある。

(3) 市販図書

市販図書として、中村（1995）と日本児童英語振興協会（2015）が挙げられる。

中村（1995）を利用した研究として、石濱（2003）、染谷（2014，2020）、石濱・染谷・内山・山崎（2014）が挙げられる。石濱（2003）は、37名の児童を対象に、2001年9月か

ら 10 回授業を実施した 2002 年 3 月と、さらに 18 回授業を実施した 2003 年 3 月にテストを実施した。その結果、統計的に有意な差を報告している。石濱・染谷・内山・山崎 (2014) は、5 年生と 6 年生の 138 名を対象にテストを実施し、信頼性係数であるクロンバック α (.761) を報告している。この研究では、学年間の比較は実施されていない。染谷 (2014) は、6 年生 118 名を対象にテストを実施し、クロンバック α (.76) を報告しているが、この研究においても変容の分析は行っていない。中村 (1995) については、比較的高い信頼性を示しており、時間変容も見られていると言える。

日本児童英語振興協会 (2015) を活用した研究として、染谷 (2020) が挙げられる。5 年生と 6 年生の計 710 名に対してテストを実施し、クロンバック α (.818) を報告しているが、学年間の比較などは実施していない。信頼性は高いが、変容を検出できるかは不明である。

5.2 読むこと

読むことについては、表 1 に示す「知識及び技能」の捉えに合致していないものが多かった。例えば、田縁・三ツ木・岡本 (2007) や田縁・岡本 (2008) では、初見の英文を読む音読テストを評価基準に基づいて採点した。評価者間信頼性係数は、それぞれ .80, .95 であり高い値を示していたが、群間比較や変容の検証はされていない。また、深澤 (2018) は、未知語を用いた発音テストを行っている。評価者間信頼性係数は、.95 であった。群間比較を行い、有意な差が見られた。これらは、信頼性が高かったが、表 1 で示す読むことの能力を測定するものとしては適切でないと考えられる。

また、自己評価 (質問紙票) において、読むことに関する項目を含めている研究はあったが、読むことの技能を単独で分析しているものはなかった。

5.3 話すこと

話すことについては、自作スピーキングテスト、話すこと [やり取り] の発話総語数と 3 語以上の文の数による評価が見られた。なお、自己評価 (質問紙票) において話すことの技能を単独で分析しているものはなかったため、ここでは言及しない。

(1) 自作スピーキングテスト

自作スピーキングテストとして、YTK スピーキングテスト (湯川・高梨・小山, 2008, 2009; 湯川・高梨・小山・川中, 2009) がある。YTK スピーキングテストは、2 名の児童と試験官で行われ、所要時間は 3 分間である。発音、語彙・シンタックス、集中力、表現力、会話統制力の観点から 4 段階で評価される。湯川・高梨・小山 (2009) には、評価規準・基準表が提示されている。

湯川・高梨・小山・川中 (2009) は、YTK リスニングテスト、アンケート、YTK スピーキングテストを事前事後 (半年の間隔) に実施した。スピーキングテストは事後テストのみであった。児童 48 名の分析の結果、コーエンカッパ係数が .85 であったことを報告している。湯川・高梨・小山 (2008) は、236 名を対象にスピーキングテストを実施した。10 名のパフォーマンスについて再度採点したところ、一致度は 88% であった。この 236 名のス

スピーキングテストについて、湯川・高梨・小山（2009）は、カッパ係数（.85）を報告している。これらの研究では、比較や変容などは分析していなかった。

Yukawa, Koyama, and Takanashi（2010）は、52名の児童を対象に5年次の3月と6年次の3月にスピーキングテストを実施した。その結果、発音と語彙・シンタックスにおいて統計的な差は見られなかったが、合計点、集中力、表現力、会話統制力では統計的に有意な差が見られたことを報告している。

まとめると、自作スピーキングテストのYTKスピーキングテストは、信頼性が高く、変容も検出されている。ただし、信頼性を高めるためには、評価者のトレーニングが必要であると考えられる。

(2) 話すこと [やり取り] の発話総語数と3語以上の文の数

話すこと [やり取り] の発話総語数と3語以上の文の数を分析している研究（山口・巽, 2021）がある。山口・巽（2021）は、児童とALTのパフォーマンステストを分析している。場面と状況が与えられ、自由に会話をする。児童の発話は、発話総語数、話題数、3語以上の文の数、会話時間、会話中のポーズの時間の割合、相槌の回数の点から分析された。この観点のうち、発話総語数は「語彙の習得状況と、知っている語句の運用能力」を、3語以上の文の数は「英語表現の習得状況とその運用能力」を測定するとしている。この2つの観点は、語句や文を話す際に用いることができているかということ測定するものであり、「知識及び技能」の捉えと一致している。

山口・巽（2021）は、話すこと [やり取り] の言語活動である small talk（ペアでやり取りをする活動）を経験している6年生30人と経験していない6年生30名を比較したところ、全ての観点において差が見られたことを報告しているが、信頼性は示されていない。

5.4 書くこと

書くことに関しては、自己評価（質問紙票）だけであったが、聞くことの技能を単独で調べている研究はなかった。また、大文字や小文字を書かせるテストの使用も見られたが、実際のコミュニケーションにおいて文字を書かせるテストではなかった。

6. おわりに

まとめると、聞くことについては、外部試験として学校英検 Jr. の SILVER 以上のレベルを活用できるが、信頼性を検討する必要がある。自作リスニングテストとして、YTKリスニングテストを音と文字の問題及び絵本の要約問題は省いて実施することができるが、信頼性を検討する必要がある。市販図書（中村, 1995；日本児童英語教育振興協会, 2015）を活用することは可能である。話すことについては、YTKスピーキングテストを活用することができる。また、話すこと [やり取り] の発話総語数と3語以上の文の数を分析することもできる。読むことと書くことについては、利用できる測定方法はなかった。

本研究の限界点として、本研究の分析対象となった研究は限られている点が挙げられる。分析できなかった文献や、整理できなかった指標があることに留意する必要がある。

小学校英語教育に関するアウトカム指標の検討

本研究では、小学校学習指導要領で示されている育成すべき資質・能力を政策目標であると捉えて、寺沢（2018）が指摘するポイント（アウトカムとして測定されている変数は、政策目標と合致しているか）の点から、小学校英語に関する研究で用いられている測定方法を分析した。「知識及び技能」の点からは、聞くことと話すことについては、共通して用いることのできるアウトカム指標が確認されたが、読むことと書くことについては利用可能な指標はなかった。

今後の示唆としては、次の2点を挙げることができる。まず、今回の分析において、自己評価を利用した研究が見られたが、技能ごとに分析していないため、分析から排除した。今後は、技能ごとに分析を行うことによって、自己評価の活用も含めることができると考えられる。第2に、読むことと書くことについては、表1にまとめた「知識及び技能」の捉えと合致する測定方法が見られなかった。今後、適切な測定方法を開発する必要がある。

謝 辞

本研究報告は、第21回小学校英語教育学会関東・埼玉大会で行った発表「学校英語教育に関する科学的根拠生成のためのアウトカム指標の検討—「知識・技能」に焦点を当てて—」（2021年10月9日）の内容を加筆修正したものである。また、本研究はJSPS 科研費19K00847（基盤研究(C)「小学校英語教育に関する科学的根拠生成のためのアウトカム指標の文献研究」2019～2022）の助成を受けたものである。

文 献

- ブリッジ, D., スメイヤー, P., & スミス, R. 柘植雅義・葉養正明・加治佐哲也訳. (2013). 『エビデンスに基づく教育政策』 勁草書房.
- バトラー後藤裕子・武内麻子. (2006). 「小学校英語活動における評価: 児童英検 (BRONZE) を使った試み」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』 第25号, 1-15.
- 石塚博規・太田とも美. (2016). 「小学校外国語活動の成果としてのスキルの定着の検証—指導方法・指導内容がスキル習得と意識形成に与える効果—」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』 第35号, 37-54.
- 石濱博之. (2003). 「『英語活動』を体験した児童の「聴解力」の伸びに関する事例研究」『小学校英語教育学会紀要』 第4号, 1-15.
- 石濱博之・染谷藤重・内山寿彦・山崎晃市. (2014). 「児童の聴解力はどのような過程で促進されるか—外国語活動における児童の情意面と聴解力の関係—」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』 第33号, 55-72.
- 泉恵美子・萬谷隆一・アレン玉井光江・長沼君主・田縁真弓・大田亜紀・島崎貴代・森本敦子. (2014). 「小学校外国語活動における評価のあり方—児童の学びの支援に関する研究—」 *JES Journal*, 14, 228-243.
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター. (2020). 『「指導と評価の一体化」のための学

- 習評価に関する参考資料 小学校 外国語・外国語活動』東洋館出版社。
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_gaikokg.pdf
- 文部科学省 (2017). 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語活動・外国語編』 https://www.mext.go.jp/content/20201029-mxt_kyoiku01-100002607_11.pdf
- 物井尚子. (2016). 「高学年児童の英語運用能力と自己評価の関係」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』第 35 号, 1-16.
- 中村彰伸. (1995). 『CD つき児童英検クリアもんだいしゅう』東京: 成美堂出版
- 日本児童英語振興協会 (2015). 『JAPEC 児童英検検定問題集 3 級』
- 大城賢・酒井英樹. (2020). 「小学校英語の目標と目的, 成果, 政策とエビデンス」小学校英語教育学会 20 周年記念誌編集委員会編『小学校英語教育ハンドブック—理論と実践—』(pp. 10-15). 東京書籍.
- 酒井英樹. (2014). 「研究デザイン」全国英語教育学会第 40 回研究大会記念特別誌編集委員会『英語教育学の今—理論と実践の統合—』(pp. 28-31). 能登印刷.
- 酒井英樹. (2021). 「小学校英語教育に関する科学的根拠生成のためのアウトカム指標の検討—「主体的に学習に取り組む態度」に焦点を当てて—」『中部地区英語教育学会』第 51 号, 85-92.
- 志村昭暢・萬谷隆一・石塚博規 (2016). 「小学校外国語活動の効果: 学習者の英語能力と情意面の変化」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』第 35 号, 69-85.
- 染谷藤重. (2014). 「小学校外国語活動における児童の動機づけとそれが聴解力に及ぼす影響に関する調査」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』第 33 号, 113-129.
- 染谷藤重. (2020). 「小学校外国語教育における児童の動機づけと英語力の関連性の分析」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』第 39 号, 125-141.
- 田縁眞弓・三ツ木由佳・岡本織華. (2007). 「小学校中学年における読みの指導」『小学校英語教育学会紀要』第 8 号, 83-88.
- 田縁眞弓・岡本織華. (2008). 「小学校中学年における読みとその内容理解に関する研究」『小学校英語教育学会紀要』第 9 号, 79-86.
- 寺沢拓敬. (2015). 「英語教育学における科学的エビデンスとは?—小学校英語教育政策を事例に」『外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部外国語教育基礎研究部会 2014 年度報告論集』, 15-30.
- 寺沢拓敬. (2018). 「小学校英語に関する政策的エビデンス—子どもの英語力・態度は向上したのか?」『関東甲信越英語教育学会学会誌』第 32 卷, 57-70.
- 和田順一・木下愛里・菊原健吾・和田孝子・酒井英樹 (2019). 「外国語活動による児童の聴解力, 英語力に関する自己評価及び英語学習に関する意識の変容—授業時数の違いに焦点をあてて」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』第 38 号, 63-75.
- 亙理陽一・草薙邦広・寺沢拓敬・浦野研・工藤洋路・酒井英樹 (2021). 『英語教育のエビデンス』研究社.

小学校英語教育に関するアウトカム指標の検討

- Wolfe-Quintero, K., Inagaki, S., & Kim, H-Y. (1998). *Second language development in writing: Measures of fluency, accuracy, & complexity*. University of Hawai'i.
- 山口美穂・巽徹. (2021). 「Small Talk を実践した児童の発話パフォーマンスの変化と情意の関係」*JES Journal*, 21, 38-53.
- 湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春. (2008). 「日本人小学生の英語コミュニケーション能力」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』第 4 号, 68-85.
- 湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春. (2009). 『小学校英語で身につくコミュニケーション能力』三省堂.
- 湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春・川中尚. (2009). 「小学校英語活動における評価ツールの活用」『小学校英語教育学会紀要』第 9 号, 55-62.
- Yukawa, E., Koyama, T., & Takanashi, T. (2010). What does “Let’s Talk” tell us?: Elementary school students’ speaking performance variability and its relation to instructional content. 『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』第 29 号, 1-15.

(2022年11月30日 受付)
(2023年 2月28日 受理)